

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

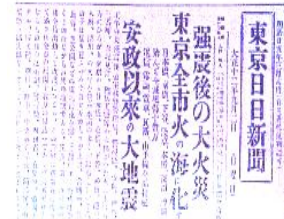
すまいるたん



第117号
平成21年
9月4日

関東大震災 北豊島郡南千住町の記憶 たぐりよせて

関東大震災 -災害状況-



震災の様子を報じる新聞と激震のため止まった中央気象庁の大時計（荒川警察署50年史）

大正12年（1923）9月1日午前11時58分、東京はマグニチュード7.9の大地震に襲われた。昼食時であったために市内134か所から出火した。東京府内の被害は、被災者190万2,952人・全壊家屋1万6,451戸・全焼家屋31万1,962戸・死者5万9,573人・負傷者2万9,999人・行方不明者1万904人・焼失面積3万6,039平方kmの大災害であった。荒川区内では工場が密集し、人口密度が高い日暮里、三河島、南千住の3か町が北豊島郡（当時）内で最も被害が大きかった。

発震とともに三河島町三河島から2か所、

日暮里町元金杉から1か所出火し、火災によって誘発された旋風のため、いっそうその被害を大きくした。

人々は激震に消火を忘れ、水道は破裂して用をなさず、消火活動が不可能な状態であった。このため日暮里町元金杉の倒壊家屋から出た火は北に進み、三河島の常磐線の南側を焼き、午後3時ごろ風向きの変化により、火の手は東南方向に延び、王電三ノ輪車庫を焼き、翌日午後1時ごろまでその猛威を振るった。（荒川警察署50年史）

「三ノ輪では火事もつぶれた家もなかったね」

ドリームショップ ナガオカ（ジョイフル三ノ輪）の先代の五十嵐春雄さんも「ジョイフル三ノ輪今昔物語」に、当商店街は関東大震災に災害を受けずと書かれております。

小林マツさんは当時12歳。二階建てばかりの5軒長屋の商店街の家同士が、傾いて屋根がくっついたと覚えているそうです。地震があった時間は始業式が終わって家におり、売る為にふかしたさつま芋を通行人に配ったそうです。余震が続き、翌日から数日間、大八車に荷物を乗せて、足立区本木の親戚に家族で疎開しました。

藤野青果（大正6年創業、ジョイフル三ノ輪）も、先代の知久さんが野菜を無料配布したと藤野たか子さんは聞いています。

「家ひし形になり天井が低くなった」

石川喜一さんは当時4歳。親子ガードを超えた（現在の南千住2丁目）ところに住んでいました。まわりは狭い路地だらけで、4軒

長屋の仕舞^{しもた}屋（商店でない、普通の家）は、トタン屋根のバラックの平屋の家ばかりでした。間口が狭く奥行きがなく4畳半と2畳とちやぶ台と茶ダンスだけしか家具はありませんでした。

「ぐらぐらと来て止まる」

余震は何度も来て瓦が落ちてきたら危ないと家から出して貰えず、4段のタンスのそばに避難してました。一般の家庭では朝、御飯を釜戸で薪で炊いたら、その後雨でも降らない限り、家の中で火は使わず、昼は外で四角の七輪で魚を焼いたりしてました。喜一さんの記憶では、周りで火事はなかったそうです。前の家のそば屋さんのうどんが、せいろから落ち道路に散乱していたことが印象に残っています。

杉山六郎さんのお父さん（23歳）がとびかしらをしており、コツ通りでは火事はなかったものの壊れた家屋の下敷きになった人達を助けるためにジャッキを持って飛び回ったと聞いています。

今回は、小林マツさん・ナガオカ（五十嵐さん）・藤野青果（藤野たか子さん）・石川喜一さん・杉山六郎さんからお聞き致しました。ありがとうございました。南千住の被災者数は、荒川警察署の記録には掲載されていませんでしたが、ジョイフル三ノ輪もコツ通りも火は出なかったようです。震災後は、他国の人が共同水道に毒を入れたというデマが飛び交ってました。震災に備えて、ぜひ防災訓練に参加してみませんか。